

史料紹介

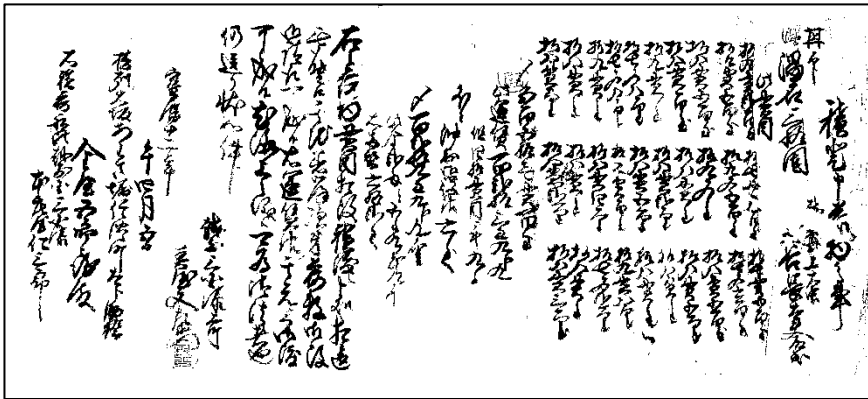
上大虫村の温石送り状について

会員 田中照久

この度旧家に伝わった温石の送り状を拝見する機会があり、全文を読むと江戸時代の越前と大阪間の物資流通の一端を垣間見ることができるので紹介したい。

温石（おんじやく）という言葉は聞かれて、あれかとピンとくる方は少ないと思う。温石とは、今私たちが使っている使い捨て懐炉の先祖である。使い捨てカイロが普及する以前、半世紀以上前に私の祖母は桐灰懐炉を使っていた。桐灰懐炉は木炭粉に桐灰を混ぜて棒状に固めたもので、専用容器に入れて背中当てていたのを覚えている。

桐灰懐炉より遥か以前から使われていたのが温石である。福井市の朝倉氏遺跡からも出土している温石は幅5cm、長さ10cmほどに加工された石で、火鉢などで温めて布で巻いて使用した。茶会などで出される「懐石料理」とは、修行中の僧侶が寒さと空腹を紛らわすため懐に温めた石を入れたことが語源と言われている。



〔翻刻〕

積登申荷物之事

上印

越前国上大虫

一 温石三拾箇 (土) 谷長太夫殿出

此貫目

拾九貫式百匁 拾七貫八百匁

拾七貫五百匁 拾九貫五百匁

拾九貫五百匁 拾七貫六百匁

拾八貫五百匁 拾九貫匁 (以下中略)

此運賃百式拾三匁九分九(「厘」か)

但四拾貫目二付九(「匁」か)

外二沖出御役銀六匁

外百式拾九匁九分九厘

此金式両与五匁九錢九厘

右兩替六拾式匁

右之荷物貫目相改積渡し申候処相違

無御座候 其地着荷次第荷数御改

御請取可(被)成候 右運賃銀其元二而御

渡可被成候 尤海上之儀、可為御法者也

仍送り状如件

越前三国湊上町

魚屋又左衛門印

宝暦十二年 午四月五日

(阿波座)

撰州大坂あ王さ堀信濃町 太郎助橋

金屋五郎兵衛殿

右積荷船頭越前国三国湊

本庄屋仁三郎

それでは、この文書を一つ一つ見ながら、流通の様子を探ってみよう。その前に上大虫村の領主の変遷を記しておく。

温石の採掘が上大虫村のどのあたりで採掘されたか今のところ詳らかでないが、宝暦十二年(1762)一度に三十個、五百五十一貫百匁の温石が運び出された。

しかし、元禄十年(1697)

紀州藩の命により、頼職が拝領した丹生郡内五十七カ村の調査を行い、その内容を記した大畑才蔵の「越前にて覚書」「内蔵頭様御領越前丹生郡ノ内村々見分書」上大虫村の項に温石の記述はなく、農業以外の生産品として、「一 奉書紙すき 七軒」の記述だけである。

因みに和田村では「石切役是ハ和田村方出候水鉢火入るいろの物を自由ニ仕候 名様之石山外にも有之候由 珍敷石也」「石役出し用候 是ハ青田石にて水鉢などを自由ニ焼物之様ニ仕出申候」、平等村では「作之外焼物仕候 つぼの類也」とあり、才蔵の調査が詳細であったことが伺える。また、「元禄拾六年村々差出状 樫津組」では「瓶役 四拾匁」が平等村に課せられている。

さて、「か様之石山外にも有之候由」は、和田村内の青田石以外の石山と解するべきか、温石を含む

それでは、この文書を一つ一つ見ながら、流通の様子を探ってみよう。その前に上大虫村の領主の変遷を記しておく。

領内の外の石山と考えるか判断できない。北山村にも石切り場があったが、見分書に記述はない。

一宝永三年(1705) 越前国丹生郡上大虫村明細村鑑」では小物成に「銀式拾式匁 紙船役」が「銀式拾五匁 鍛冶役」が見られるが、温石に関しては「一、名物右ハ温石」とあり課税の対象にはなっていない。

現在残された文書から見ると、才蔵が訪れた元禄十年にはまだ生産が始まっていなかった、或いは「御上のお目こぼし程度」即ち、名物程度の生産量ではなかったかと思われる。明細鑑の「石工 無御座候」からも生産量が推察できる。

明細鑑から五十七年後に、五百五十一貫百匁(約2067kg)の温石が大阪へ送られることになる。1個当たりの平均重量は約十八貫四百匁(約69kg)、当時の大人男性が運べる重量と思われ、白鬼女村まで運び、舟運により日野川を下り九頭竜川を経て三国湊に到着した。明細鑑によれば上大虫村より三国までの距離は十一里半である。

越前三国湊上町魚屋又左衛門が請け負った温石の運賃「此運賃百貳拾三匁九分九厘(厘) 但四拾貫目二付九(匁)」について考えてみ

たい。四十貫という中途半端な数字であるが、四十貫は米一石と同じ重量約150kgとなる。従って、温石も船に積む際には他の荷物同様単位を整え、石(こく)に換算したのではないかと思われる。この方が三国港の船頭 本庄屋仁三郎にとつても全積荷の重量を把握する上で都合がよかつたのだろう。

次に「外沖出御役銀六匁」について述べる。「沖出御役銀」は口銭のことであり、寛政十年(1798)午六月 河野・今泉浦出入之諸色口銭銀定」に「おんしやく(温石) 壹箇二付 右同断(銀式分)」とある。この「おんしやく」は、地理的に見て上大虫村より広瀬あたりに運ばれ、馬借街道を下って河野・今泉両浦に運ばれた上大虫産温石ととらえて差し支えないと思う。

河野・今泉両浦の廻船出入は三国湊同様とし、三国湊口銭役堀長兵衛と相談して定めていることから、三国湊、河野・今泉浦の口銭規程は同じと見做せる。従って三国湊で支払った御役銀六匁は、一個(約十八貫四百匁) 式分×三十個の合計金額であった。

運賃と御役銀の合計百貳拾九匁九分九厘が大阪までの運搬にかかった費用となる。これを「右両替六拾貳匁(金一両〓銀六十二匁の

交換レート)の意」から金に変換した値が、「此金貳両与五匁九銭九厘」である。仮に一両を一〇万円とした場合、三国大坂間の運搬経費は約二十一万円となる。

三国湊を出港した船は、河村瑞賢(1617-1699)が寛文十二年(1672)に開拓した西廻り航路により下関・瀬戸内海を通り、大阪湾へ到着した。

大坂は「うまれ浪花の八百八橋」と歌謡曲の一節にある様に(実際は二百橋程度)、水の都であった。淀川の外に多くの堀川(運河)が掘られ、二〇石積の上荷船(うわにふね)と十〇石積の茶船(ちやぶね)が淀川や堀川を往来した。元和五年(1619)では二六二三艘だった上荷船・茶船が元禄十二年(1699)には三六二三艘となった。西廻り航路の開発により、新たに大阪湾から市中への荷物運搬ルートが川船の増加につながったのであろう。

大阪湾に到着した温石は、川船に移し替えられ、阿波座堀を上り信濃町太郎助橋(現・大阪市西区)の金屋五郎兵衛宅へ届けられた。

このように近世の物資の流通には水運・海運が重要な役割を担っていた。まさに日野川の水は、阿波座堀川の水と繋がっていたのである。

古代より日本海の物資は敦賀湊、

小浜湊で陸揚げされ、陸路琵琶湖北岸に到着、琵琶湖湖上を船で渡り、坂本で再び陸揚された後、京・大阪へ運ばれた。しかし、西廻り航路の開発は敦賀湊・小浜湊に衰退をもたらした。その一例として木崎場窓(1688-1766)が著した「拾雅雑話 卷五 小浜」に「元禄の頃まで西国から唐津船毎年四月に来たり 土橋より北の大溝まで十間程に小屋を掛いまり焼物見せを出し 町在共此来るをまつて多くの商物いたし候事二ヶ月計 元禄末より京清水焼もの多く来りて 唐津舟も小屋懸致候ほどの商もなく今は止候よし」とある。寛文十二年の西廻り航路の開発からわずか三十年で、

